

第8回吉野作造研究賞の選考結果

〈講評〉

吉野作造記念館では吉野作造が終生後進の育成に取り組んだことに鑑み、吉野作造研究賞を設け、若手研究者の育成と吉野の精神の継承、吉野研究の裾野拡大に取り組んでいる。

第8回吉野作造研究賞は、2022年4月発行の『吉野作造研究』第18号に募集要項を掲載したほか、関連する分野の学会等に案内を送付、またインターネット上で募集告知を行った。応募資格は2022年4月1日時点で40歳以下の者とし、応募作品については政治史、政治思想史、文化史などを主題とした未発表のものか、2020年4月1日から2022年3月31日までに刊行された著作、研究論文を対象とした。また今回より、若手奨励としての趣旨をより強く打ち出すため、博士号取得から2022年4月1日時点で5年以内（2017年度以降に博士号を取得）もしくは博士号未取得の者による著作で、今後の研究の発展が特に期待できるものを対象に新人賞を授与することとした。

今回の応募は8作であり、その多くが質の高い研究成果であった。審査会による慎重な選考の結果、以下の2作品をそれぞれ最優秀賞、新人賞とした。

〔最優秀賞〕

- ・ 柳愛林『トクヴィルと明治思想史—〈デモクラシー〉の発見と忘却』白水社、2021年

〔新人賞〕

- ・ 澤井勇海、East Asia before 'Diplomacy': The Transformation of China and Japan's Foreign Policy-making, 1858-1881（博士論文、2021年5月）

最優秀賞の柳愛林氏は1984年生まれ。現在、東京大学社会科学研究所で特任研究員（所属・職名は応募時のもの—以下同）である。受賞作『トクヴィルと明治思想史—〈デモクラシー〉の発見と忘却』は、日本におけるトクヴィルおよびデモクラシー概念受容の多様な展開可能性について幅広い視野から議論した点が評価された。

第I章の肥塚龍に関する研究は、肥塚研究自体として新しい成果であり、「誤読」の意味を問うという思想史的アプローチも有意義であった。第II章の宗教論や女性論は、アメリカ・フランスにおけるトクヴィル研究のトレンドを巧みに取り入れつつ、明治日本の魅力的な思想史として展開されている。第III章についても、議論が明治期にとどまらず戦中・戦後にまで及んだ点が、目配りが広く意欲的であるとして評価された。

次いで新人賞の澤井勇海氏は1991年生まれ。現在、独立行政法人日本学術振興会特別研究員-CPD（国際競争力強化研究員）、ハーバード大学ウェザーヘッド国際問題研究所ポストドクトラル・フェローである。受賞作 East Asia before 'Diplomacy': The Transformation of

China and Japan's Foreign Policy-making, 1858-1881 (博士論文) は、近代的な「外交」の受容に関する日本・中国の差異について、政治学的視点からアプローチした比較研究として優れた成果であった。技術革新の問題への着目など近年のグローバルヒストリーの傾向を取り入れた国際的な視野からの研究である点、またそれを英文で執筆した力量・意欲的姿勢も評価の対象となった。

なお、賞を授与するには至らなかったものの、他の応募作の中にも優れた論考が見受けられた。各受賞者およびすべての応募者の今後の活躍を期待する。

審査委員会 委員長 宇野 重規 (東京大学社会科学研究所教授)
同 委 員 松田宏一郎 (立教大学法学部教授)
同 委 員 清水唯一朗 (慶應義塾大学総合政策学部教授)